

『砧』上演詞章

前ジテ
後ジテ
ツレ
ワキ
ワキヅレ(後)
アイ(狂言)
芦屋某
芦屋の従者
下人

1【名ノリ笛】

〈名ノリ〉

「**ワキ**」これは九州芦屋の何某にて候、われ自訴のことあるにより在京つかまつり候、かりそめの在京とは存じ候ひつれども、当年三年になりて候、あまりに故郷のこと心もとなく候ふほどに召し使ひ候ふ夕霧と申す女を、故郷へ下さばや

候、必ず下るべきよし、心得て申し候へ

ツレ「さらばやがて下り候ふべし、必ずこの年の暮れにはおん下りあらうするにて候

ワキ「心得て候

「**ワキ**いかに夕霧、あまりに故郷心もとなく候ふほどに、おことを下し候ふべし、この年の暮れには必ず下るべきよし、心得て申し候へ

ツレ「さらばやがて下り候ふべし、必ずこの年の暮れにはおん下りあらうするにて候

ワキ「心得て候

「**上ヶ歌**」
地へ三年の秋の夢ならば、三年の秋の夢ならば、憂きはそのまま覚めもせで、思ひ出は身に残り、昔は変はり跡もなし、げにや偽りの、なき世なりせばいかばかり、人の言の葉嬉しからん、愚かの心やな、愚かなりける頼みかな

「**上ヶ歌**」
ツレ「このほどの、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も數添ふ枕、明かし暮らしてほどもなく、芦屋の里に着きにけり、芦屋の里に着きにけり。

「**着キゼリフ**」
ツレ「急ぎ候ふ程に、芦屋の里に着きて候、やがて案内を申さうするにて候、いかに誰かおん入へり候、都より夕霧が参りたるよし、おん申し候へ

「**上ヶ歌**」
ツレ「このほどの、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も數添ふ枕、明かし暮らしてほどもなく、芦屋の里に着きにけり、芦屋の里に着きにけり。

ツレ「さらばやがて下り候ふべし、必ずこの年の暮れにはおん下りあらうするにて候

ワキ「心得て候

「**上ヶ歌**」
シテ「あら不思議や、何やらんあなたにあつて物音の聞こへ候、あれは何にて候ふぞ

ツレ「あれは里人の砧撃つ音にて候

シテ「げにやわが身の憂きままに、故事の思ひ出でられて候ふぞや、唐土に蘇武と言ひし人、胡国とやらんに捨て置かれしに、故郷に留め置きし妻や子、夜寒の寝覚めを思ひやり、高樓に上つて砧を擣つ、志の未通りけるか、万里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞こえしとなりへわらはも思ひや慰むと、とても淋しき呉服綾の衣を砧に擣ちて、心を慰まばやと思ひ候

ツレ「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ、

4 妻、夕霧の応対

妻は里人が擣つ砧の音を聞いて、胡國に捕られた夫の身を案じて砧を打ち、その音が夫のもとに届いたという故事を思い出し、そのひそみにならつて砧を打つことにする。

シテ「げにやわが身の憂きままに、故事の思ひ出でられて候ふぞや、唐土に蘇武と言ひし人、胡国とやらんに捨て置かれしに、故郷に留め置きし妻や子、夜寒の寝覚めを思ひやり、高樓に上つて砧を擣つ、志の未通りけるか、万里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞こえしとなりへわらはも思ひや慰むと、とても淋しき呉服綾の衣を砧に擣ちて、心を慰まばやと思ひ候

ツレ「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ、

5 妻の詠嘆

「**掛ケ合**」
シテ「いざいざ砧撃たんとて、馴れて臥す猪の床の上」

シテ「涙片敷く小筵に」
シテ「恨みの砧」
ツレ「擣つとかや」

「**次第**」
地へ衣に落つる松の声、衣に落ちて松の声、夜寒を風や知らずらん

シテ「音信の稀なる中の秋風に」
地へ「音信の稀なる中の秋風に」
シテ「遠里人も眺むらん」
地へ「誰が世と月はよも問はじ

妻は里人が擣つ砧の音がする。なんの音か、向こうのほうから物音が聞こえます。あれはなんであろう。昔の物語を思い出しました。唐土の蘇武といふ人が胡とかいう国に抑留されていた時、故国に残っていた妻子が、蘇武が夜寒のために眠れないことを心配して、高樓に登つて砧を打つた。その気持ちが通じたのか、万里も離れた異郷の蘇武に故国で打つ砧の音が聞こえた、ということです。わたくしも、この思いが

ツレ「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ、

2【アシライ出シ】

シテ「それ鶴鳩の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁ひあり、ましてや深き妹背の仲、同じ世をだに忍ぶ草、われは忘れぬ音を泣きて、袖に余れる涙の雨の、晴れ間まれなる心かな

をもつています。鶴鳩や平目の夫婦がそうなります。夫婦は来世までの縁といわれるようにして泳いでいる平目の夫婦も、いつか現世においても孤闇に耐え、夫を思つて、ひとり涙に暮れています。流れる涙は袖にあるほどで、心が晴れる時があります。

1 芦屋の某、夕霧の登場

芦屋の領主某は訴訟で三年滞在していた都から、国元の妻のもとに侍女夕霧を遣わして、この年の暮れには帰国するとの伝言を託す。

芦屋 わたくしは九州の芦屋の領主の某です。わたくしは自身の訴訟で、都に滞在しています。ほんの短期間の滞在と思つていましたが、今年で三年になつてしましました。さすがに故郷のことが気がかりなので、召し使つて夕霧という女を国元に遣わそうと思います。

これ、夕霧。あまりにも故郷のことが気がかりなので、そなたを国元に遣わすことにする。この年の暮れにはかならず帰国するので、そのことをたしかに伝えてくれ。

夕霧 では、すぐに下向することにいたしました。この年の暮れには、かならずお下りくださいませ。

夕霧 分つた。

ツレ「このほどの、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も數添ふ枕、明かし暮らしてほどもなく、芦屋の里に着きにけり、芦屋の里に着きにけり。

ツレ「急ぎ候ふ程に、芦屋の里に着きて候、やがて案内を申さうするにて候、いかに誰かおん入へり候、都より夕霧が参りたるよし、おん申し候へ

ツレ「さらばやがて下り候ふべし、必ずこの年の暮れにはおん下りあらうするにて候

ワキ「心得て候

「**上ヶ歌**」
ツレ「このほどの、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も數添ふ枕、明かし暮らしてほどもなく、芦屋の里に着きにけり、芦屋の里に着きにけり。

ツレ「さらばやがて下り候ふべし、必ずこの年の暮れにはおん下りあらうするにて候

ワキ「心得て候

3 妻、夕霧の応対、妻の述懐

シテ「なに夕霧と申すか、人まであるまじこなたへ來たり候へ、いかに夕霧珍しながら恨めしや、人こそ變はり果てたまふとも、風の行方の便りにも、などや音信なかりけるぞ

ツレ「さん候へ、とくにも参りたくは候ひつれども、おん宮仕への暇もなくて、心よりほかに三年まで、都にこそは候ひしか

シテ「なに夕霧と申すか、人まであるまじこなたへ來たり候へ、いかに夕霧珍ながら恨めしや、人こそ變はり果てたまふとも、風の行方の便りにも、などや音信なかりけるぞ

ツレ「さん候へ、とくにも参りたくは候ひつれども、おん宮仕への暇もなくて、心よりほかに三年まで、都にこそは候ひしか

2 妻の登場

妻は橋掛りで、夫の不在中の憂愁を吐露する。

妻 仲むつまじく共寝している鶴鳩も、将来、訪れるかもしれない別離を心配し、枕を並べるようにして泳いでいる平目の夫婦も、いつか現世においても孤闇に耐え、夫を思つて、ひとり涙に暮れています。流れる涙は袖にあるほどで、心が晴れる時があります。

妻 仲むつまじく共寝している鶴鳩も、将来、訪れるかもしれない別離を心配し、枕を並べるようにして泳いで

鳥という大嘘つきの鳥でさえ、少しはその嘘を加減をするというのに、こんなあなたのことを、誰が正気な人間だと思うでしょうか。

非情の草木も季節の到来を知つて花を咲かせ実をつけるものであり、鳥獸でさえ心をもつています。鳥獸といえば、胡国にあつた蘇武は旅行く雁に手紙を託し、ついに万里も離れた南方の故国に帰ることができたのですが、これも夫婦の絆が深かつたためです。それにたいしてあなたは、わたくしが夜寒を案じて衣を擣つたのに、どうして旅先の都で、たとえ夢の中でなりとも、それを聞いてくださいなかつたのですか。ああ、恨めしい。

『砧』鑑賞のために——詞章・現代語訳についてのメモ

演出の都合により詞章に省略・異同がある場合がございます。
この『井筒』の詞章は観世流のものですが、ワキの詞章は下掛り宝生流、アイの詞章は和泉流のものに拠っています。

【名ノリ笛】[アシライ出シ]【出端】は人物の登場楽(囃子)です。
詞章冒頭の〈上ヶ歌〉〈セイ〉〈サシ〉〈問答〉などは、当該箇所の曲節の名称です。また、〈□〉は類型的ではない節を仮にこの形で表したもので。

詞章で「が付された箇所は韻文のフシ、「が付された箇所は散文のコトバです。
掛け詞と認められる箇所にはもうひとつ意味を左肩に漢字で小さく記しています。
詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、

- ①シテのセリフ
- ②ワキのセリフ

③叙事文(小説で言えば「地の文」)
の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。
また、③叙事文の箇所の現代語訳は二字下げにしてあります。

12 終曲

〈キリ〉

地へ法華読誦の力にて、法華読誦の力にて、幽

靈まさに成仏の、道明らかになりにけり、これ
も思へばかりそめに、擣ちし砧の声のうち、開
くる法の花心、菩提の種となりにけり、菩提の
種となりにけり

しかし、夫が法華經を読誦して弔つた結果、その法力によつて、經典に、「幽靈まさに成仏す」と説かれているとおり、妻の幽靈は確かに成仏することができたのである。これも思えば、生前の妻が、ふと思いついて擣つた砧の音によつて仏心がめばえ、それが菩提を得る種となつたのであった。

(終)